

宗教的実存を 成り立たせるもの

I

本多
HONDA
Hiroyuki
弘之

現代において、宗教的実存を生きるということとは、いかなる意味をもつのであろうか。特に我ら仏教徒にとってこの語は、なにか場違いというか、仏教からは距離のあるような感覚があるかもしれない。それでまずは、この語のもつ意味を規定しておきたい。

はじめの「宗教」であるが、仏教が広い意味で宗教の語義の範囲に入るとは弁ずるまでもないであろう。次に、「実存」という言葉であるが、これは現代の哲学用語である。エグジスト

(*exist*) の翻訳用語である。この語は哲学者によっても、使用される意味が微妙に異なるのであるが、今は語源の「外」に「在る」(*exist*は *out*、*ist*は *being*であると考えられる)ということから、「脱存」とか「現実存在」という語義を踏まえて、仏教の「菩提心による生存」という意味で使用することとする。

「外」とか「内」ということは、その内外の線を引くについての判断基準に、様々な要素が考えられるが、仏教の基準では世間の一般的生

存に対して生死(迷いと共にある生存)という語を当て、その迷いから分離して「菩提(さとり)」を指す方向を菩提心というのである。それで菩提心に立った立場を「外」とし、それ以外は「内」とする。

この菩提心という「心」は、普通の人間生活を成り立たせている「意識一般」から、仏の悟り(菩提)への方向を選び取って生きようとする意欲する「心」である。それを発菩提心と言い、略して発心とも言う。そしてこの意欲が、成仏

を確信することができたところに、「不退転」とか「正定聚」という仏教用語が置かれていられる。その意味では、宗教的実存の正しい確保が、「正定聚・不退転」として、大乘仏道で表現されていると言うことができよう。

さて、その宗教的実存を成り立たせる意欲、すなわち「菩提心」は、一般的な世間関心の意識を超えていると教えられる。世間関心一般は、自己関心を中心にして、対象や環境への意識なのである。そこには、煩惱がらみの要求が背景に潜んでいて、与えられた生存に自足できないという問題があるとされる。そして、いわゆる世間一般の問題を感じ、それを解決しようとして、諸問題解決のためにもろもろの努力がなされている。

それに対して、仏道とは諸問題への関心を転じて、菩提心を成就すべく存在の根源的問題を探究するのだとされる。そして、そこに仏道の歴史が教える発心のありかたが無尽に開示されてくるのである。それは道の選びの多様性ともなり、道程の不確実性ともなってしまうのである。しかし、この道程との出遇いの選びは、漠然とあらゆる可能性が与えられるわけではない。個人の身体が生まれるときに勝手に選ぶわけにはいかないのと同じように、仏道の伝承と

の出遇いは、ある意味で運命的な必然性として恵まれるのである。

個人が生まれ落ちるにつれて、時代や民族、場所や家庭など、個人の生存は無数の所与の条件に規定され、ある特定の両親の下に、その個人の特定の身体や環境、境遇などとともに、個体の生存として誕生する。「実存」とは、この個体としての存在であるという意味では、現実の自己の存在ということであり、単なる一般的存在者に対して、それにこぼれ落ちたという意味の「脱落」的存在ということになる。

この「実存」とか「脱存」としての自己が、仏道の伝承に出遇う場合にも、広くは歴史的状況や社会状況、さらには家庭環境などが深く関わるのである。このように所与の状況に規定された「現実存在」は、エッセンス（理念的存在とか本質存在）に対しての用語であるともされる。すなわち、理想的人間や理念的に構築された人間に対しての現実存在であり、特に現代になると、戦争状況や紛争状況に巻き込まれている存在ということでも考察されてくることになる。

こういう厳粛に現実規定された存在ということは、自由意志として認められるべき方向性とは、矛盾するのだろうか。この場合の自由

意志は、特に近代の社会状況を映した場合に、時代社会の価値基準に規定されたくない自由というような意味が強く出てくることになる。しかし、仏道からするとその自由は、やはり生死の境涯の内の事柄であって、そこから離れ去るような方向性は取り得ないであろう。

こうして見ると、生死に内在的な諸問題を超えて、真実に菩提に近づくということは、どういふことなのであろうか。さらにはいわゆる菩提心と言うが、これを個人的な意欲と見るべきであろうか。善導が、「各発無上心 生死甚難厭 仏法復難欣」(おのおの無上心を発せども、生死甚だ厭いがたく、仏法また欣いがたし)と述べるが如く、無上菩提心は個人的な意欲ではないとされる。そして「共発金剛志 横超断四流」(共に金剛の志を発して 横に四流を超断し)と言われる。ここに「共発」とあり「横超」とあることが、『無量寿経』が大乘の課題を法蔵願心の下に語っていることに応答しているのだということになる。これが凡愚の自覚においてはどうであるのかは、さしあたり、このまま宿題としておかねばなるまい。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)